

## 報告

## 周縁鉱工業都市における観光都市的性格付け

## — 福島県いわき市を事例として —

友原 嘉彦

## ＜要 旨＞

本研究では福島県いわき市を事例として周縁における鉱工業都市の観光都市的性格付けについて考察したものである。話題性を背景に「女子旅」にも注力するなど観光都市的性格を強めていることが認められるが、観光者に非日常性や特別感を示す方向ではなく、市が観光者の管理を望んでいる実態が示された。この結果、地元民以外では比較的近い大市場からの一回限りの観光者を頼った内容であり、リピーターが来るような持続可能な観光都市となる方向性は採られていないことが確認された。

キーワード：周縁鉱工業都市、観光、いわき市、「女子旅」

## 1. 序論

## 1-1. 研究目的

2014年に日本政府によって「地方創生」が打ち出され、観光学界においてもさまざまな観点からさまざまな地域が取り上げられ、研究されてきた<sup>1)</sup>。その一環として、本研究では周縁鉱工業都市<sup>2)</sup>における観光都市的な性格付けについて明らかにすることを目的とする。

鉱工業都市は鉄鋼業や鉱業など重厚長大産業の一翼を担っている。工場の国外への移転や国外企業から安価な製品が輸入されてくることによる閉業などにより、基幹産業として斜陽が顕著になったが、かつては労働集約型の産業であったため、このような都市の人口は依然として多く、また、広範囲に点在している。特に周縁部に位置するこうした都市においては止まらない人口減とそれに伴う地域経済の低迷を受け、たとえば米国の「ラストベルト」やドイツ新連邦州（旧東ドイツ）の該当都市では右傾化やポピュリズムの流れが顕在化しており、人々の不安の増大や未来に希望が持てないような状況が蔓延している<sup>3)</sup>。

こうした中、観光に活路を見出そうとしている都市もあるが、一般に観光がクローズアップされる鉱工業

都市は多くない。たとえば、世界的なガイドブックであるLonely Planetの英語版の日本を取り上げた“Japan”（2017）では鉱工業都市はまったく取り上げられていない。

近年、台頭が著しい日本の「女子旅」であるが、この分野で勢力を持つガイドブックである「ことりっぷ」シリーズも同様に鉱工業都市はほとんど取り上げていない。その中で福島県いわき市だけはほぼ唯一の例外であり、同市1自治体で1冊のガイドブックを構成している（「ことりっぷ いわき」2015。以下、「ことりっぷ」）。本研究ではこれに注目し、都市単位の規模で観光に注力している事例としていわき市を取り上げ、同市がどのような変遷を経て観光都市としての性格を付加させてきたのかについて探ることとする。

## 1-2. 先行研究

学界において、鉱工業都市における観光は大きな注目を持たれている、あるいは、研究のメインストリームにある、とは言えない。世界的にもそうで、近年においても、たとえばKagermeier（2016）の観光地理学の大学生用教科書においても鉱工業都市における観光については例示されていない。しかし、これまで周縁鉱工業都市の観光について研究されたものは多くは

ないものの、まったくないわけではない。

たとえば荒木（2006）は観光へ果たす役割も少ない芸術面から、日本では北九州市門司港地区を対象として研究、「レトロ」をテーマとした再開発について掘り下げた。欧州ではグッゲンハイム美術館を中核として芸術都市化を進めるスペインのビルバオ、ウォーターフロント再開発に注力している英国のマンチェスター都市圏サルフォードについて研究し、芸術への注力が観光都市化にも繋がっていることを「成功例」として説明した。同様に橋爪（2015）もフランスのナントを事例として、工業都市の芸術への注力について紹介している。

また、内海（2017）は室蘭市を事例に工場夜景観光の現状と課題について検討した。アンケート調査の結果、女性の工場夜景に対する再鑑賞への意向が男性と比べ若干高かったことから、女性のリピーター獲得について提言した。平井（2017）は日本全国の主な鉱業都市について包括的に研究を行なった。これらの都市が有する鉱業遺産が観光資源としてどのように扱われたのかについて、鉱業の廃業から1980年代までの経済的価値を重視したレジャー施設への転換と1990年代以降の文化的価値を重視した鉱山内ガイドツアーとに大きく二分し、社会的な文脈を基に考察した。

このように周縁鉱工業都市の観光について、特に近年、少数ではあるが多面的に研究がなされている一方、観光資源単体や限られた観光注力地区についてのみの考察がメインであり、本研究の目的である鉱工業都市がどのように観光都市としての性格を付加させているかについては十分に検討されているとは認められないのが現状である。

### 1-3. 研究方法

研究目的に則り、本研究ではフィールドワークと資料の調査から課題を明らかにする。

フィールドワークは2018年2月26日から同28日まで、いわき市で行なった。26日は市役所観光交流課職員への聞き取り調査と勿来地区、湯本地区での観光施設訪問および資料収集を行なった。同様に27日は小名浜地区での観光施設訪問と資料収集、28日はスパリゾートハワイアンズの訪問と資料収集を行なった。

資料の調査ではガイドブックやパンフレット類、統計、同地を舞台とした観光関連書籍から本研究にかかる部分を抜き出し、分析した。

### 1-4. 研究対象地域の概観

いわき市（第1図）は1966年に福島県内の5市4町5村が合併して誕生した都市であり、約1230km<sup>2</sup>の市域は誕生時には日本一面積が広く、2018年3月現在も福島県内では最も広い。

人口は約35万で、これも福島県内では最大である。1990年代の半ばより減少傾向にあったが、2011年の東日本大震災にかかり、原発を有していた北方の小自治体群から避難民の流入もあり、近年は増加に転じた。

経済では1870年代から1970年代まで約100年に渡って稼働していた常磐炭田の存在が大きい。閉山前後にはいわき市を挟むように茨城県の東海第一・第二原発、福島第一・第二原発が設置された。市内では特に小名浜地区に工業が展開し、化学や金属など素材メーカーの工場が立ち並んでいる。このように、現在まで鉱工業都市としての色彩の強い都市である。



第1図 いわき市

## 2. スパリゾートハワイアンズの展開

### 2-1. 創設から 1980 年代まで

湯本地区に位置するスパリゾートハワイアンズ（第2図）は常磐炭田を経営していた常磐炭礦株式会社が炭鉱の閉山も見越して、1966年に子会社として設置した常磐湯本温泉観光株式会社の運営下で常磐ハワイアンセンターとして開業したものである。以来、いわき市の観光で最も重視される存在となった<sup>4)</sup>。平井（2017）でカテゴライズされている「1980年代までの経済価値を重視したレジャー施設」の中でも早い時期での開業である。炭鉱の閉山とフラダンスのダンサーを始めとした従業員を炭鉱で働いた人々やその家族の中から雇用して開業した常磐ハワイアンセンターの草創期のエピソードは2006年の映画「フラガール」の大ヒット<sup>5)</sup>により広く知られている（第3図）。

この施設は開業以来一貫して「ハワイアン」を名乗っている通り、フラダンスの実演が有名である。しかし、

加えてタヒチアンダンスやポリネシアンダンスも実演している。また、当地の温泉を活用し、アトラクションの豊富な温水プールや大露天風呂も整えており、ホテルやゴルフ場なども含め、レジャー施設としての規模は大きく、内容も多彩である。コンセプトやターゲットは大衆を明確に意識している<sup>6)</sup>。

1966年に常磐ハワイアンセンターとして開業する直前にはフラダンスを蔑むような地元の風潮の中、ダンサーの確保は困難を極め、ようやくのこと確保したダンサーも「あっ！裸踊りのネエちゃんだ！」などと囃し立てられる（2018年2月28日のスパリゾートハワイアンズ内における社史の展示による）といった有様であった。こうした状況ではあったが、開業するやいなや大盛況となり、訪問者数は開業初年度の125万人から年々増加した。開業後も並行して存続していた常磐炭田の主要鉱山の閉山にかかり、1970年には常磐炭礦株式会社と常磐湯本温泉観光株式会社が統合し、常磐興産株式会社が誕生、閉山（1971）の混乱も収束させて乗り切った。



第2図 スパリゾートハワイアンズ正面  
2018年2月28日に著者撮影。



第3図 映画「フラガール」(2008. DVD版)

こうして、いわき市の観光資源として定着した常磐ハワイアンセンターであったが、1980～1990年代にかけて低迷期・改革期を迎えることになる。

常磐興産元取締役の坂本（2015）によると、まず、東京ディズニーランドが開園した1983年には年間の入場者数が100万人を割ったとされ（p.288）、この頃より、改革の時期を迎えている。1988年の常磐道の開通で首都圏とのアクセスが向上し、この年の入場者数は144万人と持ち直すものの、慢性的な低迷感は否めない状況になっていた。

1980年代の常磐ハワイアンセンターの立ち位置を坂本（2015）は「団体旅行や社員旅行で賑わっていたハワイアンセンターには、“ヘルスセンター”というイメージが定着していた。また海外旅行ブームの影響で“ハワイ”が憧れの存在から身近なものになり、常磐ハワイアンセンターのイメージが年々陳腐化していることが明らかになった。これでは、今後ターゲットとすべき『首都圏のニューファミリー層』や若年層の『観光旅行者』の獲得はおぼつかない。さらに、施設への投資が小規模なものにとどまっていたため、日帰り圏内のリピーターも減少していることが判明した」とし、「これらの課題、『陳腐化したイメージの打破』と『リピーターの獲得』を成し遂げるためには、ハワイアンセンターの位置づけを変更する必要がある。温泉プールを中心とした『行楽地』から、温浴施設をさらに充実させた、滞在型でリピート性の高い『保養地＝リゾート』への転換である」と述べている（pp.290-291）。

2018年現在、「ヘルスセンター」的なイメージや真正性の観点からの「陳腐さ」が払拭されたと認められないが、すでに1980年頃には常磐ハワイアンセンターがリピーターの獲得を意識していたことがわかる。また、団体旅行からファミリー層や若年層を意識したものへとメインとなるターゲットを転換していこうとしていたことも示された。

## 2-2. 1990年代から現在まで

常磐ハワイアンセンターは1990年、スパリゾートハワイアンズと名称を変更した。会社名にも用いられる地域名「常磐」と「ヘルスセンター」をも連想させる「センター」を施設名から外した。一方、「温泉保養地」であることを強調すべく、またこれを若年層に響くよう英語で「スパリゾート」とし、「ハワイアン」より先に示した。「田舎の高齢層」が集うかのような「福島（東北）と茨城（北関東）の人々向けの素朴な“ヘ

ルスセンター”的イメージ」から、地元はもちろん、首都圏の若年層の心にも届くかのような「オシャレなレジャー施設のイメージ」への転換であったと捉えることができる。但し、確かに2018年2月28日（週内に祝日のない平日の水曜日）の観察においてはファミリー層や若年層の利用者が専らであることが認められたが、すでに述べたように、施設の作りや内容としては大衆向けであることは不変であった。

清水（2015）からは、ほかに特筆すべきこととして、これまでは引退していた結婚、出産を経たダンサーが復帰するということが1994年にあり、彼女はその後、8年間ダンサーとして勤務したこと（pp.166-167）、1997年にはダンサーの給与体系を変更、より実力を重視するようになったこと（p.200）、が挙げられる。1990年代に女性（ダンサー）の働き方を変え、モチベーションを向上させる方針が取られたことが示された。

また、引き続き清水（2015）からは、常磐興産の営業企画グループの社員による働きかけもあって映画として結実した「フラガール」（2006）がダンサーを揶揄していた地域の人々の意識を変えたことがわかる。さらに、全国的にも有名となったダンサー達は2011年に起きた東日本大震災後には「フラガール全国きずなキャラバン」として東北地方などの被災地では被災者を励まし、全国では前向きに復興に努力していることをアピールした。このように、2000年代の半ばからはダンサー達がいわき市の人的シンボルとして確立されたことがわかる。

## 2-3. 小括

本章ではいわき市の観光において第一の資源とされるスパリゾートハワイアンズの変遷と特徴について見てきた。

全国的な動きであった炭鉱閉山後のレジャー施設建設であったが、スパリゾートハワイアンズはその中でも比較的早い時期に設けられた。ダンサーが誕まれたことに伴い、人集めへの苦労が続いたものの、高度成長期やインフラの整備等の追い風により経営は続いていく。その後、テコ入れとして新規アトラクションへの投資や施設名称の変更、そしてダンサー、特に女性について、時代に合わせた働き方に変化させていくといった運営で乗り切っていく。2006年にはノンフィクション系映画「フラガール」の舞台となり、その映画が注目されたことで、施設への注目も集まった。2011年には震災の被害も受けたが、映画による知名

度や視覚的にインパクトのあるダンサーの存在もあって、市内の震災復興の象徴的な存在となり、現在に至っている。すでに示したように、内容的には特筆すべきものではなく、規模こそ少々大きいものの、どこにでもありそうな大衆向けの総花的レジャー施設である<sup>7)</sup>が、2006年の映画「フラガール」の成功とこれによる知名度と物語性の獲得、そして震災復興のシンボルとなったことで市の観光資源として大きな存在感を確立するまでになった。

### 3. いわき市における観光都市的性格付けの過程

#### 3-1. いわき市の観光史

いわき市の現在へと続く観光史において特筆すべきことはやはり1966年の常磐ハワイアンセンターの開業であろう。平安時代からの温泉地である湯本温泉も地元以外における知名度は低かった(清水2015, p.76)が、常磐ハワイアンセンターの賑わいと共に存在が知られていくようになった。この1966年が現在までの市の観光史を作る年であった。

それ以前の主な観光資源としては、海水浴場(秋葉2000)と1160年建立の国宝である白水阿弥陀堂(清水2015, p.85)が挙げられる。しかし、海水浴場は夏に限定される上、天候の影響を大きく受ける。そして、東日本大震災にかかる地震や津波の影響により、市内10ヶ所の海水浴場のうち、3ヶ所しか開場されていないこと(2018年2月現在。同月26日の市観光交流課職員である福澤仁氏への聞き取りによる。聞き取り日は以下同。)や放射線への懸念、海水浴場のすぐ先に設置された消波ブロックの壁による景観の劣化等により、観光への求心性の見通しが不透明な状況が続いている。白水阿弥陀堂は2000年代以降に進んだ観光の大衆化、「楽しければよい」という風潮の中で観光資源としての吸引力を相対的に低下させている<sup>8)</sup>。

1971年には太平洋を臨んで立地する都市型公園である三崎公園が小名浜地区の徒歩圏に開場し、さらに1985年には同公園内に市立のいわきマリンタワー(以下、マリンタワー)と称する展望塔が建った。以後、現在に至るまで、散策や眼前に広がる太平洋を望むことのできる場として観光資源にもなっている。

1988年には東北地方(福島県)と関東地方(茨城県)を分ける地点である勿来地区に市立の勿来関文学歴史館が開館した。勿来は古文で禁止を表す「な〜そ」と「来(く)」の力行変格活用未然形である「来(こ)

に由来する地名で、「来るな、来ないで」といった意味にあたる。「なこそ」は古来より恋愛や進退などにかかり、様々な和歌などに詠まれたため、同館ではそれらを展示、紹介している。勿来地区には海水浴場もある。

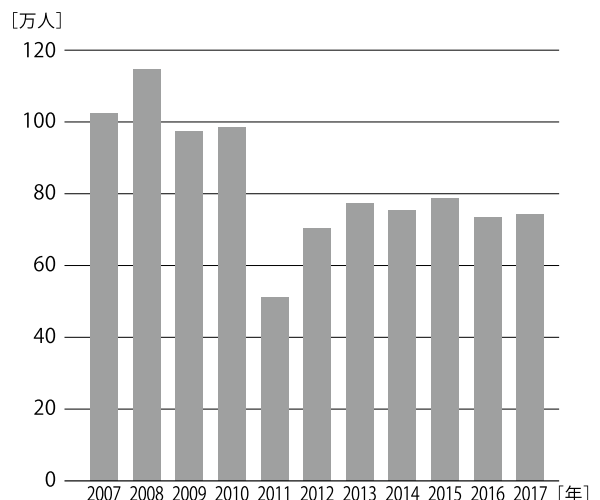
1997年には物産センターである「いわきら・ら・ミュウ」(以下、ら・ら・ミュウ)が民間の主導で小名浜の臨海地区に開設された。現在でも観光者に土産の購入や食事の場として利用されている。

翌1998年には市立草野心平文学記念館(以下、草野心平記念館)が市北部の山際に開設された。「ことりっぷ いわき」(2015)における地区別カテゴリーの1つ「山いわき」の部において筆頭に取り上げられているが、専ら館内の「アート」についての記載であり、同氏の世界観の説明は少ない。

2000年には県が主体となって「ふくしま海洋博物館アクアマリン」(以下、アクアマリン)が小名浜に開設された。アクアマリンはいわき地域に棲息する海水生物を中心に生体の展示を行なっている。

そして、2018年6月には同じく小名浜に「イオンモールいわき小名浜店」がオープンした。アクアマリンやら・ら・ミュウと程近く、小名浜地区の「賑わい」は増すことが見込まれるが、利便性に重きが置かれたことにより、非日常性は大きく減退した。

本節の最後にいわき市における近年の宿泊観光者数の推移を挙げる(第4図)。第4図からは2010年まで100万人規模であった同市の年間延べ宿泊者数が2011年の東日本大震災を経て、その後の2012~2017年の5年間では70万人規模に落ち込んでいることがわかる。



第4図 いわき市の年間延べ宿泊者数の推移  
同市の統計 (<http://www.city.iwaki.lg.jp/www/genre/1455079116262/index.html>, 2018年9月8日参照)を基に著者作成。

### 3-2. いわき市の観光資源と観光イメージ

前節において時系列で紹介したいわき市の観光資源を「女子旅」ガイドブックである「ことりっぷ」(2015)は「海いわき」(全17ページ)、「お湯いわき」(全19ページ)、「山いわき」(全13ページ)、「街いわき」(全23ページ)の順でカテゴリライズしている。「海いわき」にはアクアマリンやら・ら・ミュウ、三崎公園、マリントワーなどが、「お湯いわき」には湯本温泉、スパリゾートハワイアンズなどが、「山いわき」には草野心平記念館などが、「街いわき」には中心市街地(旧平市中心部)や勿来地区などが挙げられている。掲載の順番やページ数からは、いわき市の観光イメージとして海と温泉(お湯)が強く、地区では概ね小名浜と湯本である。小名浜は旧磐城市の中心エリアであり、湯本も旧常磐市の中心エリアである。現在の市役所や中央駅(いわき駅)は旧平市に位置するが、小名浜や湯本はいわき市としての合併前から市制を敷いていたエリアであるため、中心的な機能も有しており、市の観光は北から平～湯本～小名浜(第1図参照)が軸となっていることがわかる。

食では唐揚げなどにされる魚、メヒカリが2001年に「市の魚」に指定され、名物となっている(第5図)。市内の飲食店で提供され、加工品はら・ら・ミュウなどで販売されており、土産としての需要もある。メヒカリは海水魚であり、いわき市の海との繋がりを連想させる。

かつて市の一大産業であった炭鉱は映画「フラガール」においても取り上げられたが、現在の市の主要な観光資源とは言えない。「いわき市石炭・化石館ほるる」が湯本地区にあるが、「ことりっぷ」(2015)への掲載はなく、石炭は国外のものも含めた化石の展示と一体化される扱いとなっている。また、鉱工業都市としての文化資本的な部分、とりわけ治安に対しては「風評被害は原発関連であるものの、治安についてはこれまで確認していない。東北地方、東北人ということで、素朴でのどかなイメージを持たれているからではない

だろうか」(福澤氏)とされ、治安面でのイメージは悪くなく、観光に対しても影響を及ぼしていないと取れる。

今後の市の観光展開として福澤氏は「若い女性からの支持を得たい。家族連れ・子ども連れの増加を期待している。インバウンドなどにも力を入れているが、メインの市場は首都圏。その中で、気候や自然環境、観光資源が類似するのは神奈川県湘南エリアだろう。当市は湘南のように垢抜けてはいないが、そうした湘南のような雰囲気作りをすることで穏やかな避暑地となることができれば」と述べ、子ども連れも含めた若い女性にアピールすること、そのためには垢抜けた雰囲気を創出することが重要であるとしている。

## 4. 結論

ここまで見てきたように、周縁の鉱工業都市であるいわき市の観光資源・観光形態は主として以下のような歴史を歩んでいたことがわかる。

- ① 1965年以前
  - ・海水浴
  - ・白水阿弥陀堂
- ② 1966年から1999年
  - ・スパリゾートハワイアンズ(常磐ハワイアンセンター時代含む)
  - ・海水浴
- ③ 2000年～2010年
  - ・スパリゾートハワイアンズ
  - ・アクアマリン
  - ・海水浴
- ④ 2011年～現在
  - ・スパリゾートハワイアンズ
  - ・アクアマリン



いわき市の魚・めひかり イメージキャラクターデザイン

第5図 「市の魚」メヒカリをモチーフにしたイラストキャラクター

炭鉱からスパリゾートハワイアンズへの転換が経済的に成功したことが大きいことがわかる。炭鉱は一部を除き、観光の「表舞台」には出てきておらず、また、小名浜の工業地帯も観光地区に隣接しているが、「観光者の目に入らないことになっている」<sup>9)</sup>。しかし、B to Bの工業地帯だけでなく、2018年にはこの地区にイオンモールが進出した。これにより、非日常性は大きく削がれることとなった。

観光にもかかる都市のアイデンティティーとしては、震災復興のシンボルともなっているフラガールと彼女たちが属するスパリゾートハワイアンズ、アクアマリンを始めとする海、どちらも海（太平洋）に関係し、海と温泉が都市のアイデンティティーとなっていることがわかる。炭鉱は市のアイデンティティーから大きく後退している。「垢抜けた街作り」にも取り組むのかもしれない。しかし、過去から現在に至るまで観光に繋がるような何らかの固有文化が育まれた形跡は見受けられず、そうした文化を発信するに至っていない。スパリゾートハワイアンズやら・ら・ミュウ、湯本の温泉街からは重厚性や洗練性は見受けられず、(特に一見の) マスツーリストを管理することに重点が置かれているため持続可能性に疑問が残る。このことはスパリゾートハワイアンズが（高齢者を中心とした）団体観光者から若年層、子ども連れへのシフトを目的としているものに対してもマスツーリスト向けという点で本質的に違わない。

これまでいわき市を事例として日本における周縁鉱工業都市の観光都市的な性格付けを見てきたが、いわ

き市のような観光に注力している都市であっても非日常性や特別感を創出する方向ではなく、大衆迎合的であるのみの状況にとどまっていることがわかった。たとえば、市の代表的な観光資源であるスパリゾートハワイアンズにおいてもタトゥーを入れている者を排しており、その説明文も一方的に拒絶している内容である（第6図）など決して多様な人々に開かれているわけではない。平井（2017）が示したように、テーマパークを作ってみたほかの多くの鉱工業都市が観光都市にシフトできていない現状からすれば、いわき市はフロントランナーであるのかもしれない。しかし、いわき市においてもなお観光的性格付けは現状、まだ誰もが楽しめるというまでには至っておらず、その土地の大衆＝マジョリティーの価値観に縛られているものであることがわかる。奇しくも映画「フラガール」により、土地のダンサーに対する見方が変わったように、都市としての観光が地域の固定観念から脱し、次のステージに進むには外部からの大きな刺激が必要とされているのかもしれない。

#### 付記

本研究は日本学術振興会による科学研究費（挑戦的萌芽研究）採択課題「女性と観光に関する総合的研究」（15K12805）の一環として遂行したものである。

本論文における福澤仁氏の部署や肩書、発言、および、関連箇所については同氏より聞き取り調査後に改めて承諾いただき、掲載している（2018年11月12日、同16日、同19日）。



第6図 スパリゾートハワイアンズにおけるタトゥー客の入館を断る掲示

## 注釈

- 1) 研究対象にはたとえば博物館や農業、歴史、情報、ダムや交通といったインフラなど多数挙げられる。研究対象地域も大都市圏から山間部や離島まで偏りが無い。
- 2) 立地としては(1-2の「先行研究」においても類例を示すが)首都圏に属さず、産業としては同節で後述しているように、鉱業や金属加工(鉄、非鉄)、造船、化学といった重厚長大型のものを指し、こうした産業を経済規模やアイデンティティとして基幹としている都市を本論文での周縁鉱工業都市の定義とする。
- 3) たとえばドイツ新連邦州の工業都市ケムニッツでは2018年8月27日に6000人規模の排外デモが起き、ユダヤ料理店が襲撃されるなど緊迫した状況となっている(AFP BB NEWS)。
- 4) 市観光交流課の福澤仁係長もスパリゾートハワイアンズを「最も重要な観光資源」と言う(2018年2月26日)。また、朝日新聞の別刷り特集「東日本大震災7年 いま東北へ」(2018年3月11日)においても、いわき市内の復興に関する丸囲み写真で取り上げられた3施設のうち、最大のサイズである(ほか2つは丸囲み写真の大きさ順に、小名浜魚市場、いわき・ら・ら・ミュウ)。
- 5) 第30回日本アカデミー賞の最優秀作品賞となる(2007)など、数々の賞を受けている。
- 6) スパリゾートハワイアンズのバンドマスターである斉藤和雄の言葉にもある(清水2015, p.123)。
- 7) たとえば三重県桑名市のナガシマリゾートや大分県別府市の杉乃井ホテル&リゾートなどが挙げられる。
- 8) たとえば「ことりつぶ」(2015)では掲載されてはいるものの、僅か1ページであり、スパリゾートハワイアンズの6ページ、アクアマリンや勿来地区などの2ページに比べて小さな扱いである。
- 9) 山口、山口(2009)には「コペンハーゲンの人魚像の背景には対岸に殺風景な造船所があり、いくつもの大きなクレーンが稼働している」という旨を書いたガイドブック「地球の歩き方」に対し、「私にはそんなもの見えなかった」という大勢の人々からの便りを受けたという記載がある。

## 参考文献

1. 秋葉明(2000)「地域と観光についての考察—福島県いわき市を事例に」、運輸と経済、60、pp.49-56
2. 荒木伸子(2006)「工業都市の再生」、創造都市研究 e、1(1)、pp.1-19
3. 内海佐和子(2017)「北海道室蘭市における工場夜景観光の課題」、日本国際観光学会論文集、24、pp.129-135
4. 坂本征夫(2015)「スパリゾートハワイアンズの挑戦—ハワイアンセンター物語・常磐DNA」、清水一利『常磐音楽舞踏学院50年史 フラガール物語』、講談社、pp.273-312
- 5.) 清水一利(2015)『常磐音楽舞踏学院50年史 フラガール物語』、講談社
6. 橋爪紳也(2015)『ツーリズムの都市デザイン 非日常と日常の仕掛け』、鹿島出版会
7. 平井健文(2017)「日本における産業遺産の観光資源化プロセス—炭鉱・鉱山の遺構に見出される価値の変容に着目して」、観光学評論、5(1)、pp.3-19
8. 山口さやか、山口誠(2009)『「地球の歩き方」の歩き方』、新潮社
9. Kagermeier, A. (2016) Tourismusgeographie. UTV Verlagsgesellschaft mbH, Konstanz

## 参考資料

1. 朝日新聞別刷り特集「東日本大震災7年 いま東北へ」(2018年3月11日)
2. 「ことりつぶ いわき」(2015) 昭文社
3. AFP BB NEWS「極右デモ起きた独ケムニッツ、ユダヤ料理店を暴徒が襲撃」[http://www.afpbb.com/articles/-/3188938?utm\\_source=yahoo&utm\\_medium=news&cx\\_from=yahoo&cx\\_position=r1&cx\\_rss=afp&cx\\_id=3189069](http://www.afpbb.com/articles/-/3188938?utm_source=yahoo&utm_medium=news&cx_from=yahoo&cx_position=r1&cx_rss=afp&cx_id=3189069)(記事:2018年9月8日、参照:2018年9月16日)
4. Lonely Planet “Japan” (2017) Lonely Planet Global Limited.



## Value Adding as a Tourist City by Industrial City on the Periphery : A Case Study of Iwaki City, Fukushima

Yoshihiko Tomohara

### < Abstract >

This paper discusses value adding as a tourist city by an industrial city on the periphery. This case study focused on Iwaki city, Fukushima. Based on some tourism-related topics, the city focused on becoming a tourist city, for example, by appealing as a young women's tourism ("Joshi-Tabi") destination. However, the tourists may feel it is difficult to discover extraordinary or specialty tourism there. The city may desire to control tourism. As a result, apart from local people, one can come from a relatively large market, not as a repeater but as a one-time traveler, so the tourism situation of the city is not yet sustainable nowadays.

Keywords: industrial city on the periphery, tourism, Iwaki City, "Joshi-Tabi"

